

歴史

敵は心の中に在り

王陽明（名は王守仁、字は（伯安）は明の憲宗の成化八年（一四七二）わが国の歴史では応仁の乱の頃にあたる。「陽明」とは後年茅屋を陽明洞に置いたことから人々が敬愛を込めて呼んだ呼称である。実はこの人がわが国の幕末の若者に大きな影響を与えたのである。

王陽明の人物像は余りにも大きくて、わずかな紙面では紹介し尽くせないが、我が国では江戸時代の終わり頃になって、朱子学に代わって陽明学を学ぶ人が現れた。筆頭としては中江藤樹、とうじゅその弟子の熊沢蕃山、ばんざん同時に山田方谷、ほうこく吉田松陰、（虎之助）西郷隆盛、吉之助（河合継之助）などである。幕末から明治維新初期にかけてこの思想を具現した人々の言行は多くの人々に影響を与えた。この思想によって功罪はともかく維新が具現され、見事に近代化を开花させた事実は余りにも有名である。

陽明の人となりと思いを大胆にまとめると、次のようになる。「王陽明」は中国明代の英雄であり、大思想家。日常生活から学ぶ「じ事上磨鍊」、じようまれん知見から得た価値に対しての「知行合一」は「ちこうごういつ言行一致」や「不言実行」を究極にまで磨き上げた思想であった。（「伝習録」に詳しい）の道筋として「致良知」を中心理念として、行動と実存の

「陽明学」を打ち立てた人である。陽明は生来求道的な人で、若くして聖人の学を志し、「礼・書・易・詩・春秋」などの經典や「論語・孟子・大学・中庸」さらに仏教、詩文、兵法とあらゆる学業を修めた。そして、その人柄は、一役人として私財を投げ打ち貧民の飢餓を救い、賊を討ち、正義のために当時腐敗していた権力と闘い続けた。その純粋な生き方から讒言に遭い、瀕死の処罰を受けたただけではなく、都から南方へ何千里と離れた「竜場」りゅうじょうという辺地へ流される。そこでも、陽明は自ら草屋根の家を作り、文字も知らない人々に都の文化と人間としての生き方を伝えたのである。それにもまして、あらゆることに公平無私で、人情に篤く、多くの弟子を育てた偉大な教育者でもあった。この王陽明の生き方と生涯は日本の西郷隆盛(南洲翁)と似ている。

西郷隆盛については、近現代で評価の分かれるところであるが、これは多くの人が隆盛について知らないことが多いからである。王陽明と隆盛の似ている部分を並べてみると、隆盛の青年時代、薩摩藩は齊彬と久光の継嗣問題で藩を二分した事件があった。結局、久光派が権力を握ることになり、齊彬派は肅清された。齊彬の薫陶を受けていた隆盛は、国難を察知し、やがて中央で自らの信念に基づ

いて奔走することになる。ここで諸藩の勤皇の志士たちと交わり「陽明学」を知ることになる。しかし、隆盛を覚醒させたのは陽明学とあいまって、隆盛が庇護した罪から逃れるため月照と錦江湾入水隆盛のみ蘇生、その咎のため大島の龍郷に幽閉たつごうされることに始まる。

さらに、徳之島とくのしま、沖永良部島おきのえらぶじまへと移され不自由極まりない生活を強いられる。獄舎は二坪ほどの壁もない小屋で鍵さえ掛けられていた

という。そこで、横目役よこめやく監視役であった土持政照の親身の世話を受けることになる。土持は隆盛が純粹で私欲のない人物であることを知ったからであった。隆盛はここで、持参した八百冊の書籍のうち

「季中手定公奏議」きちゅうていこうそうぎ「陳竜川文鈔」ちんりゅうせんぶんしょう「言志四録」いししりよく「伝習録」でんしよく「経国済民」けいこくすじん「治世牧民」を中心に暗誦するまでに読んだと伝えられている。

しかもこの間、乞われて島民の子弟に四書の素読や修身、尊皇の大義を教えたといわれている。

偉人の共通点はここにあった。冤罪とはいえ罪人が人々に教育をするということは勇氣の要ることであつたに違いない。この二人はこれを行ったのである。人間には共通点として、自分が信じたことを他人にも伝えたいという本能があるのかも知れない。歴史的に偉人と言われる人々はみな広い意味で一流の教育者である。しかも、

隆盛は陽明学の真髓といわれる「事上磨錬」と「知行合一」を実践したのである。この陽明学の行動学が隆盛を含め明治維新に果たした役割は極めて大きかった。王陽明はこんな言葉も残している。「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」この一言からも、己に厳しく意志の強い人であったことが想像される。わが国が時代を江戸から明治に繋ぐためには恰好の行動学であったのである。

ついでながら、少々理屈っぽくなるが、「致良知」の概念は「大学」という書の中の「格物致知」の朱子の解釈が「外の世界の物事を追求し、心の内外を併せて知を獲得する」としていた解釈に対して、王陽明は「真実は外の事物に在るのではなく、すべてはそれを視る自分の心の裡うちにあるとしたのである。これが「格物良知」説である。しかも、「知」の一字に主体としての意志を加えた解釈であったのである。この根底には、人を信じ天地自然に対して謙虚と敬虔な思いが強く含まれている。さらに、「行動」には志を持って努力し近づくなければならないとし、課題や難問にも即決果断に対応した。

現代では古くなったように思えるが、自分の欲望という敵に打ち勝つのは昔も今も変わりなく難しい。人は生涯の大半を欲によって悩み苦しむことを考えれば、「敵は我が心に在り」は含蓄一際である。